

2022 年度 卒後アンケート（2020 年度卒業生）結果報告

卒後 1 年を経過した卒業生に対して、本学部のディプロマ・ポリシーの活用度や職業経験、学生生活で役立ったこと等に関して質問紙調査を実施した。

1. 対象および方法

対象者：2020 年度卒業生 102 名

調査期間：令和 4 年 4 月 25 日～5 月 31 日（延長：～6 月 13 日）

方法：無記名 web 調査

卒業生の自宅へ QR コード付きの依頼文を郵送し、Google フォームへの入力を依頼した。回収数が少なかった（8 件）ため、愛知医科大学病院へ就職した卒業生（74 名）に対し、リマインドメールを 1 回送信し、さらに院内のメールボックスへ依頼文を 1 回配布した。

2. KEY POINTS

- 卒業生のディプロマ・ポリシーの活用状況はほとんどの項目で 70%を超えており、達成度は高かった。
- 卒後 1 年で、「看護実践能力を獲得し、多様な役割を果たす経験」において質の高い経験をしていた。
- 卒業生が大学生活の中で社会人になって最も役立っていると思っていることは「大学での同級生との交流」であった。
- 70%以上の卒業生が仕事のやりがいを感じていると回答したが、半数以上の卒業生が現在の職場からの離職を考えていた。

3. 結果

回収数は 27 名、回収率 26%であった。

1) 対象者の基本属性

回答のあったすべての卒業生は女性で、現在看護師として就業していた。

2) ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）の活用状況（項目 1～9）（表 1）

ディプロマ・ポリシー 9 項目の活用状況を「そう思う」から「そう思わない」までの 4 段階で調査した。ほとんどの項目で、「そう思う」「少しそう思う」と回答した卒業生が 75%を超えており、ディプロマ・ポリシーの達成度は高いと考えられた。一方で「8. 看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている」に関しては、「そう思う」「少しそう思う」と回答した卒業生は 55%を下回った。卒業生らの回答した、「就職後必要とされる能力（自由回答）」では、アセスメント能力と答えた卒業生が多かった。その他、患者に寄り添う力、タイムマネジメント、効率的な業務遂行能力など、組織の一員として必要である項目の回答があった。

表1 ディプロマポリシーの活用状況

		N=27			
		4	3	2	1
		そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	そう思わない
		(%)	(%)	(%)	(%)
1	看護専門職者として学習に主体的に取り組むことができる	6 (22.2)	17 (63.0)	4 (14.8)	0 (0.0)
2	看護専門職者として必要な基礎的な知識を身につけている	5 (18.5)	20 (74.1)	2 (7.4)	0 (0.0)
3	看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる	3 (11.1)	17 (63.0)	7 (25.9)	0 (0.0)
4	看護専門職者として倫理的に思考することができる	9 (33.3)	15 (55.6)	3 (11.1)	0 (0.0)
5	看護学の基本概念である人間、健康、環境、及び看護について体系的に理解している	4 (14.8)	18 (66.7)	5 (18.5)	0 (0.0)
6	看護専門職者として必要な基礎的な看護実践能力を身につけている	4 (14.8)	17 (63.0)	6 (22.2)	0 (0.0)
7	あらゆる職種で成り立つ保健・医療・福祉のチームメンバーと信頼関係に基づき、協働することができる	5 (18.5)	19 (70.4)	2 (7.4)	1 (3.7)
8	看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている	3 (11.1)	11 (40.7)	12 (44.4)	1 (3.7)
9	看護専門職者として対象となる人々と共に健康と幸福を追求し人間的に成長しようとする態度を示すことができる	6 (22.2)	19 (70.4)	2 (7.4)	0 (0.0)

3) 職業経験の質について（表2）

卒業生の職業経験の質に関する得点は、 111.8 ± 17.3 点（平均 $\pm$ SD）であった。なお、昨年度は 107.6 ± 17.5 点、一昨年度は平均 112.3 ± 9.88 点であり、大きな変化は見られなかった。

卒業生の職業経験の質に関する得点が高かった項目は、下位尺度Ⅱ「看護実践能力を獲得し、多様な役割を果たす経験」であり、高い実践能力を獲得し、担っている複数の役割を果たすという経験の質が高いことを示した。一方で、下位尺度Ⅴ「発達課題の達成と職業の継続を両立する経験」、次いで下位尺度Ⅳ「看護職としての価値基準を確立する経験」の質得点が低かった。

文献) 鈴木美和 (2004) : 看護職者の職業経験の質に関する研究 ―測定用具「看護職者職業経験の質評価尺度」の開発―、看護教育学研究、13 (1)、37-50.

表2 職業経験評価尺度-臨床看護師用-の結果

		N=27			
		平均	標準偏差	最大	最小
I	仕事を続ける中で、自分に合った日常生活を気づく経験	18.6	5.0	25	5
II	看護実践能力を獲得し、多様な役割を果たす経験	20.3	2.5	25	13
III	他の職員と関係を維持する経験	19.9	2.6	25	13
IV	看護職としての価値基準を確立する経験	17.7	3.9	25	9
V	発達課題の達成と職業の継続を両立する経験	16.4	4.4	25	9
VI	迷いながらも職業を継続する経験	18.9	3.0	25	13
合計		111.8	17.3	150	71

4) 大学生活を振り返ったときに、社会人として役立っていること（表3）

大学生活を振り返ったときに社会人として役立っていることを、12項目について「役立っている」から「役立っていない」までの5段階で調査した。

12項目中最も「役立っている」と回答した卒業生の割合が多かった項目は「9. 大学での同級生との交流」12

名（44.4%）であり、次いで「1. 大学生活全般」、「4. 大学の実習での看護実践能力」、「11. 大学の部活動やサークルでの交流」6名（22.2%）であった。大学生活の中で得た人間関係や社会経験が卒業後に影響を与えていることが伺えた。また、大学の実習における教育が看護実践に活かされていることが示唆された。「役立っている」と回答した卒業生の割合が最も低かった項目は「5. 大学でのボランティア活動」、「8. 事務職員との交流」で1名（3.7%）であった。「少し役立っている」と合わせても、それぞれ6名（22.7%）、8名（29.6%）であり、昨年度の32%、54%と比較し減少傾向にある。要因として、新型コロナウイルス感染拡大により、大学行事及び登校機会の減少が影響している可能性がある。全ての項目で「あまり役立っていない」「役立っていない」と回答する卒業生は数名程度であった。

表3 大学生活のうち社会人として役立っていること

		N=27				
		5	4	3	2	1
		役立っている	少し役立っている	どちらともいえない	あまり役立っていない	役立っていない
		(%)	(%)	(%)	(%)	(%)
1	大学生活全般	6 (22.2)	15 (55.6)	4 (14.8)	2 (7.4)	0 (0.0)
2	大学での講義内容	5 (18.5)	14 (51.9)	6 (22.2)	2 (7.4)	0 (0.0)
3	大学での教授方法	4 (14.8)	18 (66.7)	5 (18.5)	0 (0.0)	0 (0.0)
4	大学の实習での看護実践能力	6 (22.2)	11 (40.7)	7 (25.9)	3 (11.1)	0 (0.0)
5	大学でのボランティア活動	1 (3.7)	5 (18.5)	14 (51.9)	4 (14.8)	3 (11.1)
6	大学からの短期留学	2 (7.4)	1 (3.7)	16 (59.3)	3 (11.1)	5 (18.5)
7	教員との交流	2 (7.4)	11 (40.7)	10 (37.0)	2 (7.4)	2 (7.4)
8	事務職員との交流	1 (3.7)	7 (25.9)	11 (40.7)	6 (22.2)	2 (7.4)
9	大学での同級生との交流	12 (44.4)	13 (48.1)	1 (3.7)	1 (3.7)	0 (0.0)
10	大学での先輩との交流	5 (18.5)	12 (44.4)	7 (25.9)	1 (3.7)	2 (7.4)
11	大学の部活動やサークルでの交流	6 (22.2)	9 (33.3)	8 (29.6)	2 (7.4)	2 (7.4)
12	他大学の学生との交流	2 (7.4)	4 (14.8)	12 (44.4)	4 (14.8)	5 (18.5)

5) 現在の仕事のやりがいと満足度、離職、進学希望の有無

卒業生に対して、現在の仕事のやりがいを「大変感じている」から「全く感じていない」、仕事の満足度について「大変満足」から「全く満足していない」の各々4段階で調査した。70%以上の卒業生が仕事のやりがいについて、「大変感じている」、「感じている」と回答した。仕事の満足度については、「大変満足」「満足」と回答した卒業生は63%であった。

一方で、「仕事をやめようと考えていますか」という問いに対して、離職する予定であると回答した卒業生は2名（7.4%）であった。2名ともが今後の予定について、看護師として正規雇用で別の病院・クリニックに勤務すると回答した。21名（78%）の卒業生が、離職を考えているが今すぐは辞めないと回答した。卒業生らは仕事のやりがいを感じていながらも、現在の職場を将来的には離職したいという希望を持っていることが伺えた。また、大学院の進学に興味があると回答した卒業生は5名であった。昨年度の28回答中3名と比較し、増加傾向にあった。

卒後本学に希望することについて複数回答で調査した。最も多かった回答は、「転職に関する情報提供」、次いで「卒後教育プログラム」であった。

6) 愛知医科大学の卒業生で良かったこと

自由記載として、6)の質問をしたところ、「ドクターヘリがある数少ない病院であること」との回答があった。大規模な附属病院を持った大学で学ぶことのメリットを実感していることが伺えた。そのほかに、「東海地区以外でも名が通っていること」、「実習で病院に行っていたため働きやすい」等の記載があった。

4. まとめ

本調査では、卒後1年が経過した卒業生らに、現在の就業状況、ディプロマ・ポリシーの達成状況および職業経験、学生生活で役立ったこと等に関して質問紙調査を行った。本調査で回答のあった卒業生27名は、全員看護師として就職していた。卒業生らのディプロマ・ポリシーの達成度は、9項目中ほとんどの項目で達成状況について前向きな回答が多く、おおむね達成できているものと考えられた。

27名中2名が離職を希望しており、半数以上の卒業生が将来的な離職を考えていた。仕事に対してはほとんどの卒業生がやりがいを感じており、また満足度も60%以上が満足と回答していた。また、卒後本学に希望することについて「転職に関する情報提供」が挙げられていたり、大学院進学も希望したりしていることも含め、卒後2年目を迎え、今後のキャリアについて考えている時期であることが伺えた。また、18.5%の卒業生が大学院への進学に興味を持っていた。

本年度の卒後アンケートは27名から回答があり回収率は26%であった。例年、卒後アンケートの回収率は低く、昨年度は28名(26.3%)、一昨年度は9名(8.4%)であった。本調査では、返信者の回答が比較的前向きなものが多かったが、もともと大学生活について前向きな印象を持っている者が返信している可能性は否めない。今後は回収率を上げるために、調査票の内容の吟味だけでなく、調査方法の工夫を考慮する必要があると考える。

2022 年度 愛知医科大学卒業生の就職先に対する調査 集計結果報告

卒業生の就職先から本学卒業生のディプロマ・ポリシーの到達度について第三者評価を得ることを目的に、令和 3 年度に本学看護学部卒業生が入職した愛知医科大学病院の病棟管理者に対し、本学卒業生（臨床 2 年目）の状況等について調査を実施した。

1. 対象および方法

1) 対象者

平成 29 年度カリキュラムを履修した卒業生のうち卒後 1 年が経過した者（令和 2 年度卒業生）を受け入れている愛知医科大学病院の看護師長（24 部署）

2) 調査期間

2022 年 8 月 22 日(月)～9 月 10 日(土)

3) 方法

Web アンケート

2. 調査内容

卒業生のディプロマ・ポリシー(以下、DP)の到達度について、社会人基礎力の項目を用いて到達度およびさらなる修得が望まれる能力を問う。また、卒業生の動向について退職者の退職理由を問う。なお、今回活用する社会人基礎力の項目は、本学の DP の内容が網羅されており、かつ臨床でも活用されている指標であることから理解が得られやすいと考え用いた。また、退職理由については、厚生労働省、日本看護協会の看護師の離職に関する調査結果から上位のものを抽出した。

3. 結果

愛知医科大学病院の 24 部署に配布しすべての部署から回答があったが、卒業生本人が回答したと思われるものを除外し、有効回答は 14 件とした(有効回答率 58.3%)。

1) 本学の卒業生（臨床 2 年目）の社会人基礎力の到達度の評価について

本学卒業生の社会人基礎力の到達度について、“いつもできている”“ときどきできている”を合わせた回答人数で示す。最も到達度が高い項目は、「患者・家族の苦情や不平に対してその真意を理解しようとしている(8. 相手の意見を丁寧に聴く力)」の 12 名であった。その他高かった項目は、「与えられた役割や業務について疑問があるときは質問し理解しようとしている(1. 物事に進んで取り組む力)」11 名、「自分の長所、短所を理解し調和を保つよう努力している(12. ストレスの発生源に対応する力)」11 名、「業務遂行上困難なときその他のメンバーに協力を依頼している(2. 他人に働きかけ巻き込む力)」10 名、「セクション目標、割り当てられた業務を理解し、仕事の優先度をつけている(10. 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力)」10 名であった。一方、達成度が低い項目は「日常業務のひとつひとつにもっと良いやり方や効率的な方法はないかといった視点で取り組んでいる(6. 新しい価値を生み出す力)」4 名、「チームの目標に向けて自分のできることは何か考え発言している(4. 現状を分析し目的や課題を明らかにする力)」6 名であった。

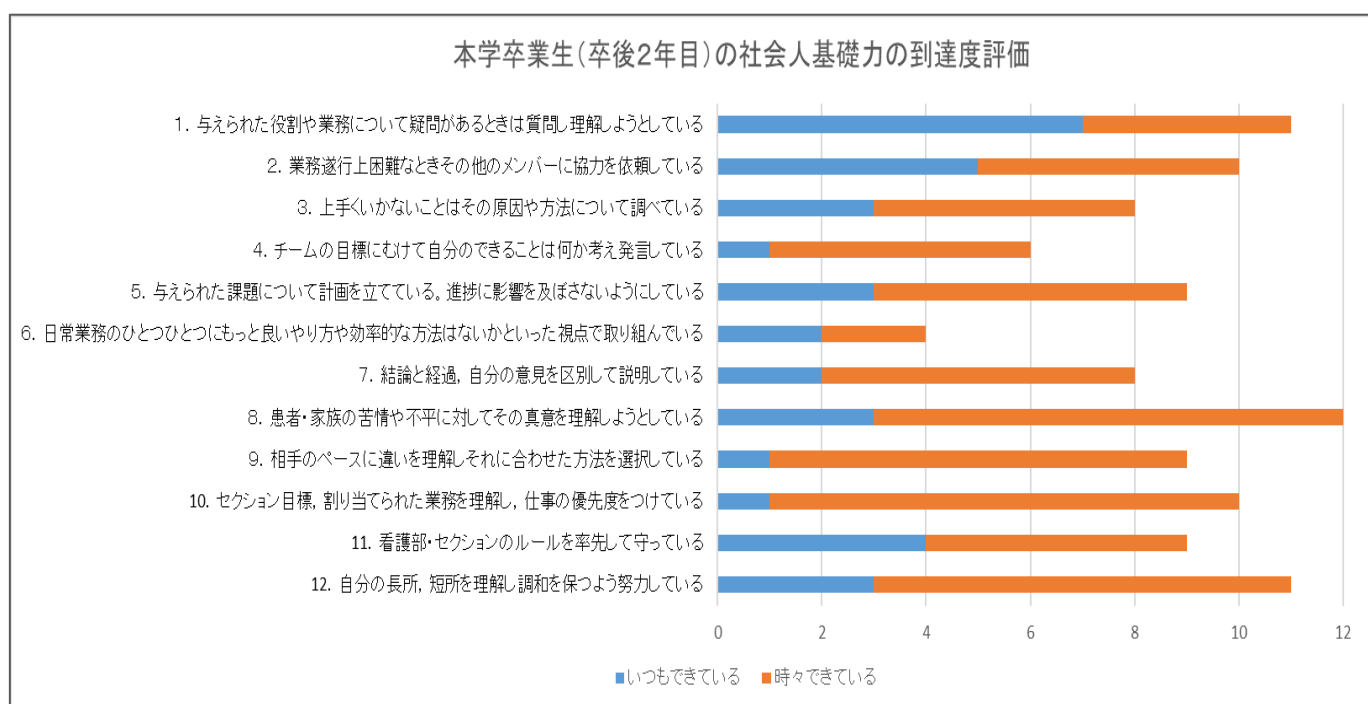


図 1 本学の卒業生(臨床2年目)の社会人基礎力の到達度の評価

2) 本学の卒業生(臨床2年目)において、さらなる修得が望まれる能力(社会人基礎力)について

さらなる修得が望まれる能力について、最も回答の多かった能力は【4. 現状を分析し目的や課題を明らかにする力】であり、次いで【5. 課題の解決に向けたプロセスを明らかにし、準備する力】、【6. 新しい価値を生み出す力】、【7. 自分の意思をわかりやすく相手に伝える力】であった。

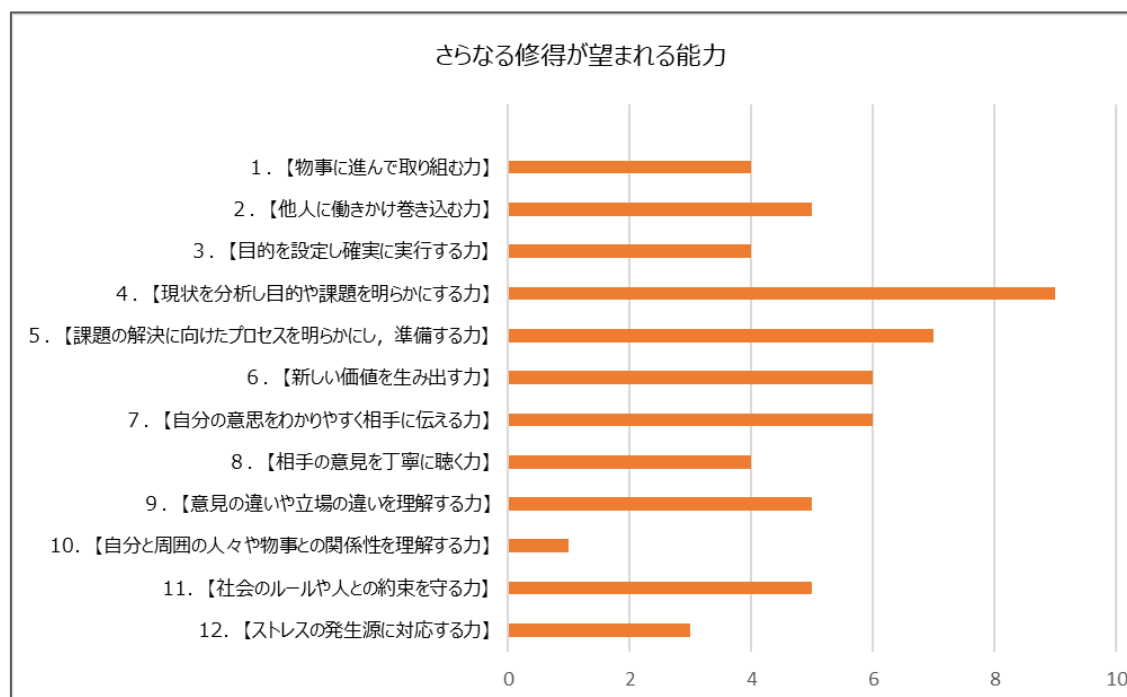


図 2 本学卒業生のさらなる修得が望まれる能力

3) すでに退職した本学の卒業生（臨床2年目）がいる場合の退職に至った理由について

14 部署中、10 部署については“退職者はいない”と回答していた。その他の部署において退職に至った理由は、【通勤時間を要する】、【家族の介護】、【身体的/精神的な健康問題のため】であった。

4) 本学の卒業生（臨床2年目）に対して気づいた点について（自由記載）

- ・同期同士ではコミュニケーションを密にしており、仲間意識は強いいため助け合い業務に向き合っている。
- ・同期で関係性もよく、お互い情報共有することができている。
- ・同期同士で研修への参加や情報共有が積極的に行えている。お互いをフォローし合う姿勢がある。
- ・真摯に仕事に取り組む姿勢があり、患者からの評価を得ている。
- ・自立している。勉強熱心
- ・とても大人しいがレジリエンスは強いと思われる。決められたことを期限内に実施するのが苦手である。
- ・テキパキと行動できる反面、自分のことを優先しがちで患者さんの訴えを患者さんに合わせた間を持って伺うことが苦手のように思われる。
- ・患者の気持ちが理解できないことが多い。不適切な言動や行動、インシデントが時々 見られる。
- ・与えられた事しか行えない傾向があり、自ら考えて行動することができない。特にアセスメント能力が低く、2年目なりの患者の状態把握ができないことが多い。
- ・コロナのため業務量が増え、昨年度との違いに戸惑っており疲労が強く感じられる。業務による負荷を乗り越えることで成長できるのでは？と考えているが、どのようなフォローが良いのか、悩みながら接している。
- ・社会人基礎力の向上
- ・例年との差は感じない

5) 本学に期待することや要望事項について（自由記載）

- ・個別的な指導方法を考えるにあたり参考にしたいため、在学中に問題となる点や就職後に気になる点がある場合は情報が欲しい。

6) 本調査に対する意見について（自由記載）

- ・臨床2年目全員を踏まえての意見のため、低めの回答になってしまっています。
- ・とても良い取り組みであると思います。

4. まとめ

1) 本学卒業生（卒後2年目）のディプロマ・ポリシーの到達度について

今回の調査結果から、本学の卒業生（卒後2年目）は、相手の意見を丁寧に聴き他者との調和を保つこと及び疑問があれば質問することができる。一方で、与えられたことはできるが、現状を分析して新たな課題を明確にすることや発展的に考え発信することは十分ではないという特徴が明らかになった。

社会人基礎力の【4. 現状を分析し目的や課題を明らかにする力】、【6. 新しい価値を生み出す力】の能

力に対する評価が低い結果であったことおよび自由記述からも、卒業生の特徴として、自ら考え行動することが難しいことや、アセスメント能力の低さ、患者の訴えに応じた関わりの難しさが挙げられたことから、本学 DP の「3. 看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」、「8. 看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている」の項目については課題がある状況が示された。

本調査に先立ち 6 月に実施した卒後アンケートの結果において、卒業生らは DP の到達度についてほとんどの項目で 80% 程度の達成度を示していたが、「3. 看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」(77%)、「8. 看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている」(51%) の項目については、他の項目と比較し低い到達度を示していた。この結果は今回の調査結果と一致しており、卒業生の認識する DP の到達度と卒業生を受け入れている病棟管理者の認識が同様であることが示された。

2) 今後の教育上の課題

本調査および卒後アンケートの結果をふまえ、以下の 2 点を今後の課題とする。

- (1) 科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができることを強化するために、各科目の講義や演習、実習のプログラム内容や演習方法等の工夫を検討する。
- (2) 与えられたことだけでなく、現状を的確に捉え自ら考え行動する力や、新たな知を創造する力を高められるようにするために、教養ゼミナールや卒業研究などを通じて多様な価値観の理解や看護学の発展に向けた主体的な行動を促すことを検討する。

3) 次年度以降の本調査について

- (1) 本調査の対象は、病棟管理者であったが、卒業生本人が回答したと思われるものが半数近く存在した。調査依頼内容や調査票において、対象者を明確にわかりやすく示すようにすることのみならず、師長会等での直接依頼といった方法も検討する。
- (2) 卒業生が複数名在職している部署では、個人差があることにより回答に困難をきたすことが想定されたが、それに関する意見は 1 件のみであった。全体の傾向として回答していただきたいことを明示しており、ご理解いただけたと考える。
- (3) 今年度は医大病院のみを対象としたが、次年度以降は医大病院以外の就職先も対象とすることを視野に入れ、内容及び依頼方法・実施時期について検討する。